

協議会ニュース

75号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 2000.3



8月のFU研修は「海の生物」でした。
知多支部のみなさんの指導で実施。

海辺の觀察会は
実に楽しいねえ!

○イラスト上から
柳原氏・中井氏
降幡氏

〔組織検討委員会中間報告〕

協議会の見直しについて

事務局

一昨年11月から、組織検討委員会を設置して、20周年を迎えるとしている協議会のあり方を検討してきました。今までにこの委員会の会議を7回開催し、協議会の性格や組織のあり方がおぼろげになってきましたので、ここで皆様の御意見を聞くため中間報告を行うこととしました。

この内容に対するご意見、今後の会の運営に関する意見などを松尾 初または事務局までお寄せください。お待ちしています。

ま　ま　ま　ま　ま

1 会の問題点と方向

協議会は、昭和56年に発足して、今では会員400名を越える会になりましたが、事務局体制などは会の発足時とほとんど変わらないままに運営されてきたため、多くの問題点が出てきています。それを整理すると次のようになると思われます。

〔問題点〕

① 組織が会員に理解されていないこと

設立の経緯から、協議会とは、指導員が集まって作った会というより、県が作った会で指導員だから加入しているという認識が、今でも会員には多いと思われます。この会は、県やNACS-Jとは独立した、指導員が自主的に作った会として運営される必要があります。

② 事務体制が弱いこと

事務が特定の人だけで行われているために、会の運営が実務面でも意志決定面でも特定の人に集中しています。従って、会の

事が遅れが勝ちになったり、事業などが会員の意向に十分合っていないことがあると考えられます。事務局として今迄も会員の意見を聞く努力はされていますが、多くの会員が会の運営や事業に直接参画するような体制にしていく必要があります。

③ 企画力のある会に

組織の基本的な事項について企画したり検討したりする面が弱いと思われます。企画担当などがあって、社会の動きや会の事業の進め方・結果などを常に検討しているような体制を作る必要があるようです。

④ 巾広い事業の展開を

最近の協議会の事業は、毎年ほぼ同じようで、社会の新しい動きなどに添って事業を開拓する点が欠けているようです。会員には、様々な知識能力を持った人がいるはずで、それを活用して、幅広い事業の展開を進めることができます。このため、多くの会員の協力を得られる事務体制が必要と思われます。

⑤ 支部のあり方と協議会とのつながり

会員数の増加に伴って各支部の事務体制が大変になっており、定例自然観察会などが増えて指導員が忙しくなってきたこともあります。また、協議会の行う事業と支部の行う事業との調整をはかり、相互に効率的な運営がなされるように配慮することも要です。

こうした問題点に対してどのような会にしていくかを検討することになりますが、併せ

て協議会の役割とは何かを考える必要があります。

〔協議会の役割〕

指導員の活動は、基本的には個人的なものかもしれません、それをいろいろな面からバックアップすることも必要であり、そこに協議会の役割があるようです。

それを整理すると、理論の検討（観察会に対する考え方、自然についての考え方等）、技術の向上（観察指導方法等）、調整（広報や各種活動との連携、受託事業の実施等）などが考えられます。

NACS-Jは、連絡会（協議会）は会員の活動に対する後援や情報交換ができればよいとしていますが、指導員の協議会という立場からは、指導員のレベル向上などを全体として図るために、観察会に対する考え方の整理や技術の向上にも取り組むことが必要と思われます。さらに、社会のニーズに対応して観察会を積極的に受けたり、自然の仕組みや大切さなどを普及する努力を重ねたりすることも大切ではないでしょうか。例えば、現在社会的に要請が強まっている環境教育の手法を開発することなども我々がやってよいことです。

指導員は何をなすべきかという議論は内部でもされますが、指導員には何が求められているかという視点もこれからは必要と思われます。

ただ、今回の組織検討では理想とする会の活動にこだわるよりも、当面は事業の実施体制の強化を目標として、活動の内容は新執行体制が動き出す中で、徐々に検討していくべき良いのではないかと考えています。

〔事業の進め方〕

次に現在の協議会の事業の内容は、今後どうしたらよいかを考えました。協議会の事業は、観察会・研修会・調査を3本柱として

おり、これは今後とも踏襲していくべきかと思われますが、その内容についてはその時の状況に合ったものに変えていく必要があります。

◎自然観察会

協議会の行う自然観察会は、指導員講習会の精神を受けたものとして進めるべきとの考え方から「自然観察基本方針」を設けています。これは、基本的には変える必要はないと思われますが、会員の理解を得るようなマニュアル等の作成が必要のようです。

昭和58年以来、毎年各支部1回ずつ行ってきた県委託観察会がなくなりました。また、従来シリーズ観察会とか全県一斉観察会なども行ってきましたが、後継者育成及び指導方法の研究の場として今後も統一的な観察会を行っていくのがよいだろうと思われます。

一部で始められていた月例観察会が広まって、現在では指導員の行う観察会の中心的なものとなり、協議会（支部）はその連絡調整の場としての意味を持つつあります。

また、指導員派遣は、協議会や各支部などで行っており、近年は保健所からの依頼が増加しています。これは会のPRのためにも積極的に進めるべきで、行政等に売り込むことまでしてもよいと思われます。しかし、当面は、受け入れ体制の確立が必要です。

◎研修会

内部の研修会は、参加者が少ないので長年の傾向で、それとともに内容も以前より貧弱になってきています。研修会の実施体制・内容とも新たなものを考えるため、発想を替える必要があるようです。現在の研修会は、遊びがないのがつまらなくしており、役立つ研修をと考え過ぎるのも飽きられる原因となっているかもしれません。

発展的に考えるならば、市民講座のようなものとして実施する方法もあります。

◎その他の事業

協議会が他に認められる実績を持つ組織と

なるためには、自然保護問題への取り組みとか環境教育への対応など、今後果たすべき役割はいくつか考えられます。それも、課題ですが、会の主たる目的である自然観察会と研修等を充実させることができが大切であり、当面はそれに力を入れることから始めるのが良いと思われます。

2 今後の対応

いろいろ考えていくと、たくさんの課題や検討すべき点はありますが、とりあえずは事務局体制の確立が手始めのようです。協議会の事業をなるべく多くの人で進めるような組織づくりを当面考えていきたいと思います。

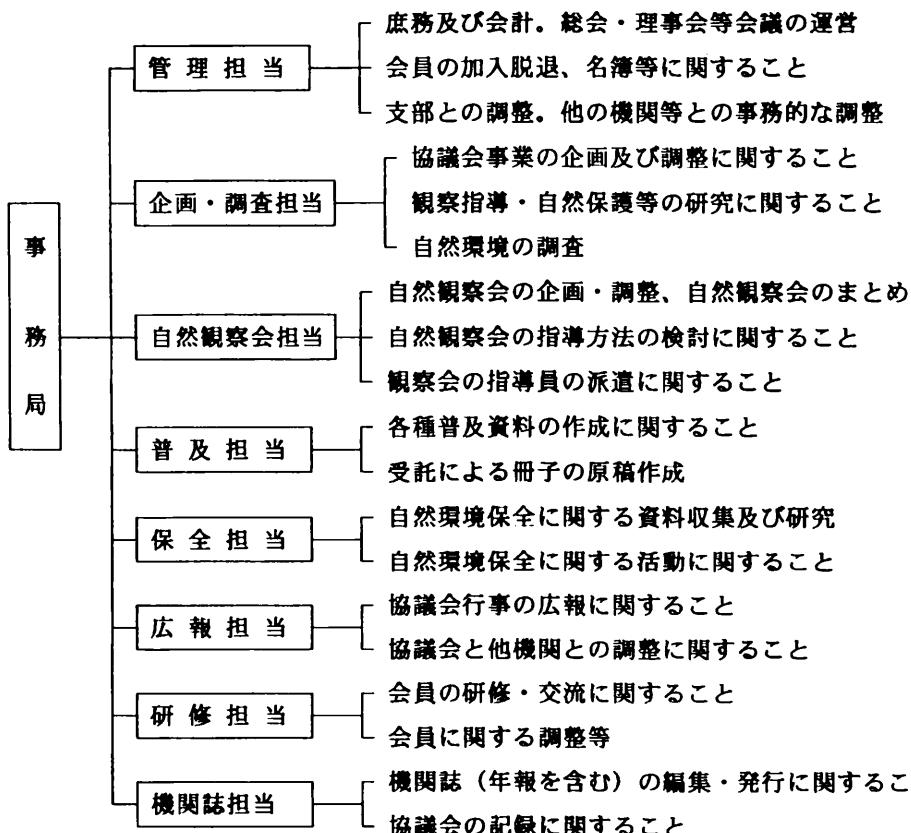
そのための案として、下の図のように、事務局に8つの担当を置き、各事業はそれぞれ

の担当が企画し、実施することとし、各担当の長（幹事）からなる、運営委員会（仮称）を年6回程度行い、それぞれの連絡調整を図っていくようにします。特に、企画担当を設けて、協議会の事業や運営を常に考えていくような配慮もしてみました。

協議会の意志決定などは、従来どおりの会長・副会長・各支部長、それに事務局の各担当の長を理事とした理事会で行い、その上に会員総会を置くことは、ほぼ今までと同じでどうかと考えています。

平成12年度初めに、このような体制をまず作り、動き出しながら、会の性格や事業、支部との関係、会の名称なども検討していきたいと思っています。いかがでしょうか。

（事務局の事務分担）



近畿・東海ブロック会議

事務局(佐藤)

自然観察指導員連絡会の情報交換を目的として、近畿・東海地区のロック会議を不定期に行ってきましたが、その第4回目の会議を平成12年2月19~20日に瀬戸市（労働者研修センター）で開催しました。

近畿・東海には9つの連絡会がありますが、今回は都合の悪い府県が多く、奈良・京都・愛知の3府県しか集まれませんでした。それでも自然観察を行う仲間が集まり、実りの多い内容の情報交換ができたと思います。その概要を次にまとめます。

↑ ↑ ↑ ↑

1 参加者

奈良県 久保田 有、 笹野義一

京都府 芦田 昇、 留岡 昇、 西川忠樹、
西村玲子、 星野光正、 真田博子

愛知県 浅見良平、 大竹 勝、 大谷敏和、
近藤義裕、 柴田美子、 高谷昌志、
長谷川洋二、 佐藤国彦（博子）

(17名)

2 日程

2/19 情報交換会 15:00~17:30

- ①「各府県の状況」
- ②「自然観察と自然保護」
- * 夜は、懇親会。

2/20 現地見学会 9:00~12:00

万博予定地 海上の森

3 他府県の概要

[奈良県]

奈良県では、今まで指導員講習会が実施されていないため、他府県で受講した方でもって連絡会を作り、26名の小人数で活動してい

ます。奈良県という地域性を生かし、自然だけでなく文化的な内容も含めた観察会を行っているようです。友の会制度も作っています。

課題として、地域の活動との連係、会員の資質の向上、指導員講習会の実施などを考えています。

〔京都府〕

会は、25名の幹事会で運営し、役職を設けていません。活動は、親睦と研修のための例会と、一般観察会・講師派遣などの観察会活動を会の柱としています。

観察会は、みんなで作り上げる共同作品という姿勢で、会の名前と責任で観察会を実施しています。

4 「自然観察と自然保護」

● 連絡会は、本来自然観察会などの普及指導を目的とした会であり、自然に関心を持つ人という裾野を広げるのが役目である。しかし、最近N A C S - J の方針が少しづつ変わって、自然保護に関わりを持つ方向に向いてきているように思える。

● 初めから自然保護ではなくて、やっているうちに自然の大切さがわかってくる。観察会は楽しいだけで終わってしまうのではなく、自然に向かう人を増やしていくことが大切ではないか。

● 自然保護運動ばかりで、基礎的な知識などを教える人がいなくてもよいのか。

● 動物を見た感動があつてこの活動に入るようになった。理科教育的なことはやりたくないと思っている。

● 以前自然保護運動に関わっていたが、今は自然観察などを通じて裾野を広げる活動をしている。しかし、普及だけでは時間がない

という感じがつきまとう。今のペースでの活動が実る前に自然が失われてしまわないだろうかと考えてしまう。

- いさましい活動を見てそれにならうことだけでなく、地道に速効性は無いかもしれない活動も必要と思う。仕方がないからやつているという面もあるが。
- 我々の活動は、初歩の人を対象とするだけでよいのかという意見もある。
- 時間がないというあせりは、同じように持っている。行政に対して直接意見を言つていかないと駄目とも思う。もっと根本的な自然の見方を持たねばならない思うこともある。
- 観察会をやっていて、子どもの感受性はすごいと思う。自分が教える立場であるとは言えない。とにかく自分に気が付いたことをやっていくしかない。自分がどうするというのではなく、共に自然を見ていく中から何かが出てくると思う。
- 今やっていることがマスターーションのようなもので、戦闘的な部分も必要ではないかとも思える。そういう意味で、N A C S - J の役割もある。地道な活動も必要だが、それをアピールすることも大切である。
- 地道な活動をしていれば、自然に輪が広がっていく。他の団体から指導を頼まれたり、行政から意見を求められたりすることも出てくる。
- 万博や藤前干渉だけで自然が守られるのではない。各地で小さな活動をやっている人がたくさんいることも必要である。
- 自然保護運動は一つの方法で、それだけで終わってしまってはいけない。
- 指導員のつどいでマイナスの観察会という言葉が出たが、そういうものがあるのだろうか。
- 自分の考えを押しつけるような観察会ならマイナスと言えるだろう。特に、子どもに対しては。
- 自然の中に入つて、何を感じるのが大

切で、覚えるだけでは楽しくないという声も聞かれる。

- 田舎では、自然保護よりも目先の利益が重要視されている。自然を利用する事が主になっていて、自然観察活動もやりにくい。
- 山村では食べていくことが第一で、余裕がないから、自然についての活動もできないのではないか。
- 観察会をキチッとしていないところでは自然保護もあり得ないのでないか。
- 人間が自然の中で生かされていることを伝えるのが観察会のねらいでもある。

〔事務局の感想〕

自然観察は、自然の好きな人を増やそう、自然についてもっと知つて欲しいという気持ちで活動を続けているのではありますが、会議の中で「時間があるのか」という言葉がでたように自分たちの活動が、本当に自然保護につながっているのかという不安感も多くの方が持っているようです。

自然保護運動が、今までに開発の抑制や世論づくりに果たし地役割は大きいものがありますが、それとともに、自然について理解のある人を少しでも増やすことも大切です。自然について関心を持つ人を増やし、多くの人が自然と自分の生活について思いをめぐらせるようにならなければ、永続的な自然の保護はできないでしょう。裾野を広げることはなかなか難しいことですが、回り道ではあっても、それが基本と思われます。

そのためには、自然観察のような普及活動が各地で開かれていることはとても大切に思われます。我々はもっと自信を持って、観察会活動に取組めばよいと思うのです。

しかし、一つ気



を付ける点はあると思います。観察指導は自分の知識と感性でもって人に対する場です。観察会の参加者は意外に敏感なもので、指導者の自然を大切に思う気持ちや自然を知るための日頃の努力は自ずと参加者にも伝わっていくものです。自分の知識や体験を語るだけでなく、自分の思いを参加者に伝えるような姿勢が必要と思われます。そのためには、独

りよがりにならないように注意し、自然に対する自分の姿勢を常に確認していくことも大切ではないでしょうか。

会議の終了後は、夕食会から部屋に集まつての懇親会で、遅くまで幅広い分野での意見交換が続きました。それがお伝えできないのが残念ですが。

自然観察と自然保護（当日の資料から）

* 当日配布した資料を次にまとめます。あわてて作ったもので、内容は十分吟味されていないものですが。

1 自然保護運動との違い

◎自然保護運動：自然を守るためにの力

〔対症療法〕

・保護運動は両刃の剣（大きなエネルギーを要すること、手段を選ばぬことも必要）

◎自然観察会活動：底辺を広げるもの

〔保健活動〕

・普及活動は、敵を作つてはいけない

①どこにでも入つていけることの大切さ

（一般・各種団体・企業・行政等）

②長期間の活動が必要なこと

（世論づくりは簡単ではない）

2 観察会活動での保護活動

◎自然観察を通じて地元等との調整

・フィールドに関係する行政機関との交流により管理・開発に際して意見を言える立場をつくる。開発等の情報を早めにつかむ）

・観察会を通じて地元民に地域の良さを知らせていく ⇒ 何かのときの力

・フィールドの管理等で行政との接触があれば、その経緯を一般にも伝える必要あり（指導者とはいえ、自然を自分のものにしない。皆で考えていく姿勢）

◎フィールドの貴重さの把握と P R

・観察会や調査を通じて、フィールドの中の

貴重な生物等の存在、自然環境の評価を行っていくこと

・状況により、その貴重さ等を行政や地元民に伝えていく（貴重生物の盗採に配慮）

3 自然保護につながる観察会活動

◎その場所の自然が好きになること

・自然の良さ・面白さを伝えていくこと。

（まず自然が好きになってもらわなくては次に進めない。しかし、いつもそこに留まるのも問題。我々は、つい参加者に迎合しがちになる傾向はないか）

・親切に名前を教えること。

（名前を知りたいという気持ちはほとんどの参加者にあるので、これを無視できない。しかし、我々は名前の教え方があまりうまくないのでは）

◎自然の仕組みを伝えること

・自然がどのように成り立っているかを伝えることは大切である。しかし、自然の仕組みとして何をまず伝えなければなら ないかが整理されていない。

（我々が説明している自然の仕組みは理科教育的なところから脱皮していないのではないか。マニュアルの必要性）

・楽しく知識を伝える技術を持つこと

（観察会では、長々とした説明はできない。簡潔に、わかりやすく、楽しく伝えるには指導技術が伴う。例えば、生態系という言葉をいかにわかりやすく伝えるかを

日頃考えているだろうか)

◎人間生活との関わりを考えていくこと

・実際の観察会で、人間生活と自然の関わりを説明するのはどうしても堅苦しさが伴う。如何にして肩のこらないやり方ができるか。(最も良い方法は、参加者がつい人と自然のことを考えてしまうもの。難しいが)

・自然と人間生活のつながりを説明する場合、どうしても一般的な話になってしまうのではないか。その場所の自然を対象に具体的に行っているだろうか。

(例えば、その場所の自然が以前どのように使われていたかなどを調べて、それを基に話を進めるなど)

◎自然と付き合うためのマナーを伝えること

・楽しむための採取(山菜等)の場合のマナー、貴重な自然ではいけない行為、地元の生活への配慮、危険な生物との付き合い方などをしっかり伝えることが大切と思われるが、日頃どこまでそれを行っているか。



哺乳類の話 (NO. 3)

山田一孝(名古屋支部)

[身近な場所で見られる動物は?]

前回は、雪山でのフィールドサイン探索のお話をしました。けれども、冬に雪の山では、誰でもが気軽に出来るフィールドとは言えません。もっと身近な観察会で取り上げることが出来る哺乳類はいないものでしょうか。それにどこまでいってもフィールドサインだけというのは、観察としては少々インパクトが弱く、自然観察に入門段階の方には退屈かもしれません。動物にストレスを与える配慮に欠けた接し方は論外として、生きたけのものを一目見るチャンスを観察会としてうまく演出できないか考えてみましょう。

[ムササビ観察会]

かなり昔の学生時代、生物研究のサークルで活動していたころの思い出です。春、新入生を迎えた大学では様々なサークルが新人の獲得に奔走します。我が生物研究会も例外ではなく、有望な新人を獲得しようと知恵を絞ることになります。勧誘のために効果的なのはやはり実演であり体験というわけで、音楽

系サークルの演奏会や体育系サークルの模擬試合に当るものとして、生物研究会が企画するのが「新入生歓迎観察会」です。植物班は春の花を探しにハイキングに、鳥類班は春の渡り鳥に会いに水辺あるいは雑木林へと出掛けていきます。それでは、我々哺乳類班は?

けものを相手にする場合、姿を見ることは原則として望むべきではありません。用心深く、数も少ない彼等に直接会えることは希ですし、見ることにこだわって追いつめてしまうことは許されません。また、だからこそ偶然の出会いが強く印象に残るともいえます。とはいえ、新人をつれての観察会が足跡や糞ばかりでは、飽きられてしまいそうです。偶然の出会いが感動的ならば、それを味わせてあげる方法はないものかと、新人に気を使う先輩は考えました。

その場所に出掛けていけば確実に姿を見る事ができ、しかも遠方でなく町から日帰りで行ける場所で、人目を恐れないで観察しやすく、ただじっとしているのではなく、動き、食べ、鳴き声をあげ、様々なしぐさをみ

せてくれて、なおかつあまり小型ではない、適当に迫力を備えた野生の動物。そういう都合の良いけものがどこかにいないものでしょうか？

ムササビは、これらの条件をほぼ満たしています。神社などの鎮守の森は都市近郊でも比較的良好に保存されている場合が多く、そこにムササビのすみかとなる樹洞を持った古木が存在します。そして、ムササビ自身も大胆に人の生活圏に入り込み、積極的に利用するしながら生息しており、しばしば社務所の屋根裏などに入り込んで住み着いている例を聞きます。そんな個体は、軒先の決まったすきまから毎晩出入りするのが見られ、また天井裏を走る足音が聞こえるので、観察ポイントのねらいがつけやすくて便利です。

ムササビは、けものには珍しく大きな鳴き声を頻繁にあげるので居場所が簡単に特定できます。また梢などで姿をさらしていくても、それほどあわてて隠れようとせず、悠然としています。けものの観察よりは、バードウォッキングに近い感覚です。思うにこれは「飛ぶ（滑空）」という能力によって、地上に縛られた人に比べて圧倒的に優位に立っているという共通点がもたらす類似ではないでしょうか。その点が観察する側にとってまことに都合が良いというわけです。

このように観察しやすいムササビするために、自然観察の愛好者が多い東京などでは、有名な生息地である社寺、たとえば高尾山などに、週末の夜毎にいろいろな団体が観察会を催して集まることになります。更にこれが、話が最初に戻りますが、各大学生物研究会の新入生歓迎観察会のシーズンともなると、一夜に数校の生物研がはち合わせをして、境内が学生だらけになってしまったりします。にしろ新人も先輩もまだ合って間がないわけで、お互いの顔もうろ覚え、そのうえ夜の暗闇の中です。すぐ傍らにいて話をしていた男が、実は初対面の他校の学生だったと、後から気

づいたりします。いや実はそれよりも、深夜の森の中、同じ目的で徹夜をしていると不思議な連帯感が満ちてきて、名前も知らない者同士が気易く話し合い、盛り上がる出来たりします。ムササビ観察会の一番の収穫とは、この不思議感覚を味わえることかもしれません。なお、そんなに人が集まって、動物へのストレスは大丈夫か心配になりますが、結果としては動物の生活との一定のバランスはとれているようで、営巣を放棄して、個体数が減っていくといった事態は起きていません。これはむしろ観察する側のマナーと熟練に負うところが大きいようです。

〔観察の注意〕

では、このような観察ポイントをどうやって探すか、そして観察の際に注意すべき点などを順に述べてみましょう。

ムササビは、先にお話したように、都市からそれほど遠くない郊外の社寺林にしばしば住み着いています。そこで観察会の候補地を探すなら、まず地図を広げます。都市から郊外に向かってたどっていき、住宅の密度がさがっていき、耕作地か丘陵地に接するあたりに見当をつけて、神社やお寺のマークを探します。山や丘のふもとに、それらを背後に背負うような形で建っている社寺をチェックして候補地をいくつか決め、下見をします。行ってみて、境内にスギの大木が林立し、背後の丘が雑木林に覆われていれば有望です。境内の木の下を見回って、ムササビの糞（直径3～5mmの球形のおがくず玉）や食痕（図）が落ちていて、幹にかきむしったように爪痕が見つかれば、生息確認は完了です。万全を期すならば、周囲の住人に聞込みをし、日没までねばって、ムササビの鳴き声を確認することも出来ます。

こうして候補地を絞ったら、日没ころをねらって何度も通い、何時ころから動き出すのか、どの梢に姿を現しどっちに向かって飛ぶ

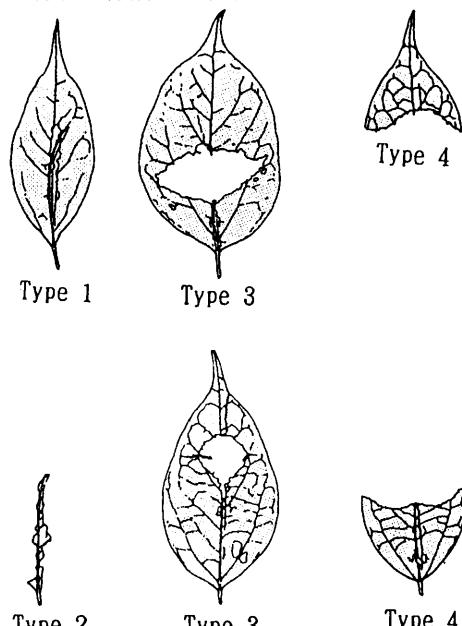
のか、といった基本的な行動を把握してゆきます。このような行動作業は当然夜間作業になります。ライトを使っての観察となりますが、夜行性の哺乳類をライトで照射する際には必ず赤いフィルターかセロハンををかぶせて赤色光にします。これは、動物の多くが赤い波長側の光を感じにくいといわれるためと、光のまぶしさを殺して目を眩ませないためです。ということは、むやみに大型のライトを使わず、できるだけ必要最小限の大きさにとどめる工夫も必要です。

ライトを小さくする工夫に通じることですが、ムササビを発見する際に目印になるのが目の輝きです。夜行性動物の目は、入射した光をよく反射するため、ライトを向けると光の点となってよく目立つのです。ムササビがこちらを向いていれば二つ並んだ輝く点となります。そして、その反射光は非常に正確に照射された方向に戻ってくるため実は一番よく見えているのはライトの位置なのです。ライトを手に持って腰のあたりにかまえていると、見落とすことすらあります。また、一人が発見して傍らの人に知らせたとしても、1m横にいる人には反射光がとどいておらず、言わわれてもわからないこともあります。

そのため確実に見えるこつはライトを顔の横、視線に出来るだけ近い場所にかまえて視線に沿って照らし、顔ごと動かしていきます。ヘッドランプを使うのも効果的です。誰かにムササビの位置を教える場合は、その人の背後に回って、肩越しに照らしてやります。このため、観察会であまり多人数でない場合は、小さいライトを各自が持つと便利ですし、子どもなどが加わって大勢ならば逆にライトをリーダー（グループ分けしてそれぞれのサプリーダーが持つ）だけが持ち、リーダーの後ろから決して離れないこと、「勝手に歩き回らないこと」と申し渡しておく方法も有効です。これは、夜の暗い中での活動なので事故防止の効果もあります。このように、反射を

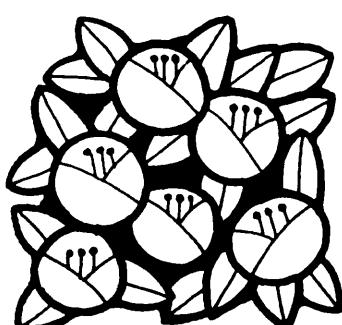
より正確に捉えることにより少ない光で観察できることになります。

ともあれ、ムササビがいるだけでは観察会に組み立てることは出来ず、その場所での行動を根気よく把握したうえでシナリオを書かねばなりませんから、準備に時間がかかります。その代わり、一度我がものにすれば、その後長く使えるフィールドとなるのも、けもの観察の特徴でしょうか。



クズの葉につけられた食痕

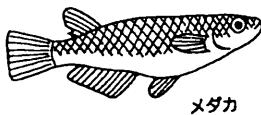
(作画：奥田陽子)



“絶滅危惧種” メダカの放流

大仲知樹（尾張支部）

尾張支部の大仲です。淡水魚や両生・爬虫類に興味があり、濃尾平野を中心にそれらの分布調査等をしています。最近のメダカをめぐる一部の人たちの行動がテレビなどで報道されていることを知り、気になることがありましたのでペンを取りました。



メダカ

【メダカをめぐる現状】

平成11年2月、環境庁から発行された汽水魚・淡水魚類のレッドリストで、私たち日本人にとってなじみの深い淡水魚、「メダカ」が絶滅危惧種Ⅱ類としてリストアップされました（環境庁1999）。ほ場整備により生息環境が悪化して、全国各地で減少していることが掲載理由のようです。

愛知県内のメダカの状況を詳細に調べたことはありませんが、都市部を除く県内各地の平野部を中心に分布しています。ただ、分布が連続しているわけではなく、地域によっては山間の池にしかいなかったり、ごく少数が局所的に生息していたりと決して安心できる状況とはいえません。

このように絶滅危惧種になってしまったメダカを保護しようとする動きが各地で行われていると、最近になってニュースなどで報告されています。メダカ関連のニュースの中でも、特に多いのがメダカを飼育下で繁殖させている人たちについての報道です。メダカは条件が整えば割と簡単に繁殖するので、飼育下での増殖は有効な保護方法のひとつかもしれません。ただ、これらの人の中で、他の地域から持ってきたメダカを繁殖させ、元の生息地とは違う地域に放流している人がいることが問題なのです。

【淡水魚の遺伝的な特徴】

メダカに限らず淡水魚の多くは、移動範囲が限られているため地域ごとに分化が進み、遺伝的に隔離された集団（個体群=population）ができやすい生物です。つまり、同じ種類でも地域が変われば遺伝的に異なっているのです。実際、全国のメダカについて遺伝的な組成を調べた報告によれば、日本のメダカは大きく分けて北日本と南日本の2つの主要集団に分けられ、更に南日本の集団はいくつかのグループに細分されるそうです（酒泉1987）。ちなみに愛知県のメダカは、南日本集団の東日本型に分類されています。ただ、遺伝的組成を調べる際、他の淡水魚の例では調べる遺伝子の部位によっても変異が検出されることがあります、同グループ内でも突然変異などにより遺伝的組成が少しづつ異なることもあります。

【地域性を無視した放流による弊害】

地域ごとの遺伝的な特徴を無視して放流することの弊害は、ゲンジボタルで知られています。ゲンジボタルはご存知のように発光して求愛行動をします。この発光の間隔に地域差があるのですが、地域差を無視して放流などを行ったため、今までにない発光間隔の集団ができてしまいました。発光間隔が異なれば、正常な求愛行動が行えなくなり、繁殖にも支障が出る可能性があります。

また、人工的に増やされた個体は、人工環境下での生存や成長には長けていますが、自然条件での生活力に欠ける遺伝的性質を持っている場合があります（原田1994）。そのため、人工的に増やされた個体を放流し、野生の個体と交配すれば、野生下での生存に不利（病気に弱かったり、繁殖が十分に行えない）な世代が生まれ

る可能性があります。メダカについては、これほど明確な弊害は現在のところ知られていません。しかし、地域性を無視した放流は、メダカの遺伝的な多様性を縮小させ、長い年月をかけて行われてきたメダカの分化（進化）を妨げることになると考えられます。

【メダカの放流】

ある地域のメダカがもつ遺伝的特徴は、特別な技術や分析機器がないとわかりません。しかし、基本的にそれぞれの地域集団が独立した遺伝的特徴を持っていると考えて良いと思います。そのため、飼育下での繁殖を考えるなら、産地のわかっているもので行うべきで、放流は元の産地へ戻さなければなりません。もし、業者などから産地のわからないメダカを入手した場合、それが増えても放流は行ってはいけません。増えてしまったある地域産のメダカを別の地域へ放流することは保護でもなんでも無く、今まで培われてきたその地域のメダカの歴史を踏みにじる行為になります。目には見えにくい自然破壊であるといっても過言ではないでしょう。

【メダカを含めた淡水魚の保護】

魚類は水中を生活圏にしているため、他の生物群に比べ一般に馴染みの薄い生物です。あまり知られていませんが、愛知県を含めた伊勢湾周辺の東海地方は全国的に見ても淡水魚の種類が豊富な地方で、国の天然記念物であるネコギギやイタセンパラ、地方自治体の天然記念物であるウシモツゴ、ハリヨなど、この地方にしかいない淡水魚も分布しています。これらの希少な淡水魚の一部について分布が調べられただけで、ほとんどの淡水魚は詳細な県内の分布がわかつていません。今後も県内各地で発見または再発見される可能性があります。

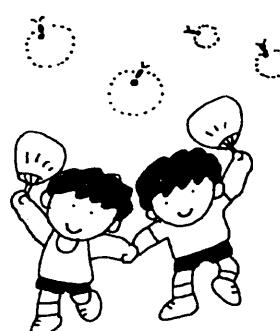
たまたま、近所にこれらの希少な淡水魚がいることがわかり、それらを守っていきたいと思ったら、まず、生息地の保全を優先させて、現

状調査、行政への働きかけ、地域の人たちへの啓発活動を行っていくべきでしょう（森1997）。遺伝的な問題が伴う飼育やその放流は保護の最終手段と考え、水族館や他の公的な機関と連絡を取りながら進めていくべきと考えます。県内では碧南海浜水族館、近県では三重県の志摩マリンランド、滋賀県の琵琶湖博物館で希少淡水魚の保護増殖が行われています。水族館の学芸員の方に保護方法の相談をされると良いでしょう。ちなみに各水族館とも飼育生物が飽和状態にあるため、希少生物を持ち込んでも飼育管理は難しいようです。

生物の保護は人それぞれの考え方があり、問題も複雑で難しい行為です。しかし、メダカをはじめとした淡水魚やその他の生物の保護に遺伝的特徴への配慮が必要なことは明らかです。今後、私たち会員は観察会や機関紙などを通して少しでも多くの人たちに生物の遺伝的特徴への配慮を理解してもらえるようにすべきではないでしょうか。

参考文献

- 環境庁（1999）：汽水・淡水魚類のレッドリストの見直しについて、8pp
原田泰司（1994）：放流の間接効果、月刊海洋、26, 8, 496-500
森誠一（1997）：トゲウオのいる川、206pp., 中公新書
長田芳和・細谷和海編（1997）：日本の希少淡水魚の現状と系統保存、379pp., 緑書房酒泉満（1987）：メダカの分子生物地理学、日本の淡水魚類（水野信彦・後藤晃編）、81-90、東海大学出版会



「渥美の自然とウミガメを訪ねて」について

知多支部 植原 靖

研修旅行

知多支部では年に1～2回（ここ数年は年2回行っています）研修旅行と称して、指導員のレベルアップと懇親を目的に、1泊の旅行を行っています。何しろ「研修」旅行ですから、欲を出してできるだけ多くのものを見て行こうとするし、「夜の語らい（もちろんアルコール飲料付き）」や「早朝散歩」などといった自由参加の恒例行事もあったりして、毎回ハードな日程の旅行になっています。今年は、去る6月26日（土）～27日（日）に渥美半島方面を訪ねてきましたので、そのあらましを報告します。

何故に渥美か

環境庁が都道府県に委託して「海域自然環境保全基礎調査～海棲動物調査（ウミガメ生息調査）」を行っていて、平成11年度は愛知県でも行っているのですが、知多半島の海岸については、知多支部が受け持つことになりました。早朝海岸を歩いてウミガメの足跡を探して上陸を確認するというのが調査内容なのですが、ウミガメの足跡など見たことがない人が大部分ですので、過去の上陸記録の聞き取り調査を兼ねて、南知多ピーチランドに押しかけて副所長の柏原さんにレクチャーを受けたりしました。実物も見てみたいね、との声もあって、それなら実績のある渥美半島へ行って、地元の保護活動グループとの交流もしましょう、というのが今回の旅行の発端でした。

いつもながらの出発風景

26日（土）午前8時に東海市役所駐車場に集合。総勢17人（2人は現地で合流予定）と、最近の旅行行事の中ではやや少ない人数で

した。天気は曇り。肝心の夜から翌日にかけての予報は芳しくありません。雨男、雨女がいるせいだとか、やっぱりだれそれは遅刻したとか、わいわい言いながらの毎度お馴染みの出発風景で、4台の車に分乗して出発しました。

干潟・貝掘り・ミサゴ

途中、吉良町の金蓮寺で休憩して、午前11時に田原町の汐川干潟着。予めお願いしてあつた東三河支部の大羽康利さんの案内で早速干潟の観察を始めました。



汐川干潟 280haの面積があるそうで、ゴミ処理場問題で話題になった藤前干潟の2倍以上。ラムサール条約登録に国・県は積極的だが地元の合意が得られてないとのことです。

シギ・チドリの種類と数の多さで有名な汐川干潟ですが、この時期は鳥の種類が最も少なく、アオサギやカワウの姿が目立つ程度でした。鳥の観察では多くを望めないというわけで、面々は干潟に降りて貝掘りに興じました。オオノガイ、オキシジミ、アサリなど

（貝の種名については確認作業を行っていないので間違っているかもしれません）いるわいるわけで、一部はその夜宿の食卓を賑わすことになりました。白状しますが、支部の研修行事ではちょっと羽目を外して「自然観察の掟」を破ることがあります。

大羽さんの話によると、川の水が汚れたせいか、このところ海藻（アオサの類か）が異

常に増えたそうです。



汐川干潟を前に大羽さんのお話を聞く参加者

干潟を後にする直前、沖合いの杭の上にミサゴを発見。魚を主食にするタカの一種ですが、どの観察会でもタカはスターです。フィールドスコープで代わる代わる覗いてその凛々しい姿を堪能しました。

海岸植物

大羽さんとお別れをして、石灰岩の採取地や、埋め立てたのに売れ残っている工業用地を見ながら、渥美町江比間海岸へ向かいました。到着はお昼をかなり過ぎていましたが、まずは海岸でハマサジ、シバナ、ハマヨモギ、ハマゴウ、ツルナ、ハママツナ、ハマアカザ、アイアシなど知多の海岸では近年減ってしまった海岸植物やアカテガニ、アシハラガニなどを観察しました。その後海岸で遅めの昼食。野外での昼食もこの研修旅行の楽しみのひとつです。



江比間の海岸植物群落にて

ヤマトミクリ・鏡岩・シデコブシ

渥美町石神の般若寺の近くでヤマトミクリを見て、鏡岩（大きな岩の表面がツルツルに磨か

れたようになっていて、鏡のようにものが写る）、伊川津のシデコブシ自生地を見て、午後5時半頃に宿（赤羽町内の民宿）に到着しました。

雨の海岸暗夜行

夕食は、あかばね塾（ウミガメの調査・保護活動をしている。ウミガメの他にも多彩な文化活動を行っている。）から代表の金原康朗さんはじめ4人の方をお招きして交歓会を兼ねた会食の会にしました。

交歓会の後、今回の旅行の目玉であるウミガメとの遭遇を目指して、午後9時過ぎに1台のワゴン車で（詳細を書くわけにいきませんが想像を絶する光景でした）海岸へ。あいにくの雨の中、あかばね塾の皆さんのが案内で約1時間半、知多地方の海岸とは比べ物にならないほど広い砂浜を歩きました。途中で数日前にウミガメが上陸して歩いた跡だという所を見ましたが、残念ながら実物には出会えませんでした。宿に帰る直前、ヘイケボタルが一匹だけ青白い光を放っているのに出会いました。

諦めきれなくて翌朝4時過ぎに激しい風雨の中、海岸を歩いた参加者もいましたが、やはりカメには出会えなかったそうです。

雨・ぎよぎよランド

27日（日）は朝から強い雨。前夜遅くまで起きていたし、天気も悪いので恒例の早朝散歩はなくなりました。このひどい天候ではいろいろ見て歩くのも大変だからというわけで、施設見学の方針変更して、豊川市のぎよぎよランドを訪ねることにしました。この施設、豊川に生息する淡水魚を中心に展示しております。

次回予告

次の知多支部研修旅行は奥三河支部との交流を兼ねて10月23日（土）～24日（日）に行う予定です。他支部からの参加も歓迎しますのでお問い合わせください。（問い合わせ先 0562-55-6855 降幡）

日本雑木林会議に参加して

朱雀英八郎（名古屋支部）

日本雑木林会議が99年11月13、14日犬山市でなされ参加した。今回のテーマは「どう持続する私たちの活動」。7回目になるが、始めての時猪高緑地の東たいようの杜の合宿に誘われたことからの付き合い。犬山市の後援支援も受け、場所は新しくできた国際観光センタでなされた。

里山、雑木林が注目されるようになり各地で取り組みの交流を主に昨年は横浜、来年は山口と広がっている。

犬山市の歓迎パーティで市長の挨拶は、これからは里山が観光のポイントにとふれた。全体会では林進岐阜大学教授と神奈川、大阪、仙台から報告を受けどうするか、どう位置付け、環境教育、人集め手入れ活動、子どもの遊び、市民参加などの分科会につなぐ。木を切るな、そのままになど意見もある中で各地で竹が増えるどうかと課題を出した。

分科会で環境教育、子どもの遊び分科会では天白公園ブレイリーダを置いての活動、緑区新海池後援作りでコミュニティガーデン構想、金城幼稚園での野外での遊びなど、仙台から小学校校長の取り組み、樹木園を育て食べることを取り上げる盛り上がった話になった。（資料あり）

犬山の大竹、相生山の近藤、平和公園の滝川さんも出ていたが、自然保護の視点でどう関わるかは課題とされよう。

会の中で雑木林の生き物のことがふれられないことから「雑木林は生きもの住処であり、里山は人との関わりで意味あるが、そこに住む生き物が多い。とりわけ今日の焦点は自然、生き物との共生であることを心に留めてほしい」と発言した。里山雑木林がなぜ大切か湿地、池、田畠を含む里山が今減少なくなりた希少種の

住処としての価値が見直されている。

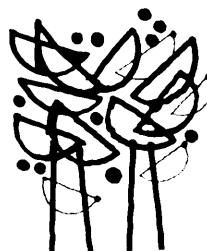
名東自然グループとして展示紹介「池湿地、菜の花レンゲ畑の写真、野鳥の郷、チョウの園作り、絶滅危惧種トウキョウサンショウウオ、ガガブタに触れ雑木林の保水で湿地、田畠が生き物の住処になること紹介した。（地域では自然塾ネイチャクラブとしてクラフト、クッキングを含み青年こどもと活動）

森の忍者はここにいる！

石井幸子（尾張支部）

4月の終わりにナナフシの赤ちゃんを6匹みつけました。この葉を食べているのだろうかと観察を続けていくと、その葉はポツポツと小さな穴がいっぱいあき始め、ナナフシもどんどん細長く成長してきました。

その葉はアカメガシワです。今まで気がつかなかった。今年の新発見です。皆に教えるとおもしろいくらい見つける事ができるようになります。日がさすと葉裏にナナフシが映ります。かわいい忍者はアカメガシワが大好きでかくれてはいないので！観察のおもしろさってこれだなと思いました。



行 事 実 内

★ 協議会通常総会

- 期日：平成12年3月26日（日） 13:30～
- 場所：名古屋市公会堂 第6集会室（鶴舞公園：JR中央線、地下鉄「鶴舞」駅
*10月29日（日）には、協議会20周年記念行事を計画しています。

★ 平針観察会

平針で定例観察会を行っていますが、4月から1年間は、自然観察指導の新人研修会を兼ねた形で、指導員向きに実施することとしました。覗いてみてください。

○実施日：毎月第1土曜日 午後1時30分から〔2時間程度〕（4月のみ第2）

○場 所：名古屋市昭和区 針名神社～荒池周辺（集合：針名神社駐車場）

4/ 8 「春の植物（季節と生活形）」 5/ 6 「植生調査をしよう」

6/ 3 「土壤生物の観察」（FUMO） 7/ 1 「初夏の虫たち」

8/ 5 「竹と笹の観察」 9/ 2 「セミとバツタ」

10/ 7 「造成地の植物」 11/ 4 「つる植物の特徴は？」

○問合先：佐藤国彦（05617-3-5674）

※編集後記※

今年の夏は天候が不順でした。雷を伴う局地的なにわか雨が多く、鉄道が落雷でストップしたり、川で人が流される事故などが起きました。自然はいつも私たちに優しいばかりではありません。観察会では自然の素晴らしいばかりが強調されがちですが、自然の怖さも忘れてはならないことに思えます。



協議会の組織検討委員会の経過報告が出されました。多くの会員の方の協力、参加を如何に得ていくかが課題となりそうです。この協議会ニュースも、77号から新体制で編集が行われる予定です。協議会について、ニュースについて、皆様のご意見等をお寄せください。

原稿や意見等はFAXでも受け付けます。

FAX (052) 651-1649 近藤まで

— 目 次 —

・協議会の見直しについて	1
・近畿・東海ブロック会議	4
・哺乳類の話③	7
・“絶滅危惧種”メダカの放流	10
・渥美の自然とウミガメを尋ねて	12
・日本雜木林会議に参加して	14
・森の忍者はここにいる	14